

## J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第7番 ホ短調 BWV 793 —

藤 本 逸 子

### はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』<sup>1)</sup>の楽曲分析と演奏解釈」<sup>2)</sup>と題し、「第1番 ハ長調 BWV 772<sup>3)</sup>」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ハ長調 BWV 787」から「第6番 ホ長調 BWV 792」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第24号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第7番 ホ短調 BWV 793」を取り上げたものである。

### 楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 7」は、3度あるいは6度の音程差で同時に出現する主題によって、主題の二重化が行われている。転調も比較的自由に行われており、この曲集の中では珍しい作風である。

「W.F.バッハのための小曲集」<sup>4)</sup>において、この「Sinfonia 7」にあたるのは、51番目の曲で、「Fnatasia 3」(BWV 793)と題されている。双方には、表Iに示したような、違いが見られる。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミーターによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表I 「Sinfonia 7」と「Fantasia 3」の相違箇所

Sinfonia 7	Fantasia 3
③ <sup>5)</sup> 下声1~1拍半め H音 <sup>6)</sup>	③ 下声1~1拍半め H音 Cis音 H音
⑬ 中声3拍め H音 A音 G音 Fis音	⑬ 中声3拍め H音 Fis音
⑳ 下声3拍め 八分休符 D音	⑳ 下声3拍め 八分休符 C音
㉑ 下声1拍め E音 D音	㉑ 下声1拍め D音 E音
㉒ 上声3拍め A音 E音 A音 G音	㉒ 上声3拍め A音 Es音 A音 G音
㉓ 下声3拍め 八分休符 C音	㉓ 下声3拍め 八分休符 H音
㉔ 下声1拍め D音 C音	㉔ 下声1拍め C音 D音
㉙ 中声1拍め Fis音 C音	㉙ 中声1拍め Fis音
㉚ 上声3拍め Fis音	㉚ 上声3拍め Fis音 C音 H音 A音
㉛ 中声3拍め 十六分休符 C音 H音 A音	㉛ 中声3拍め 四分休符
㉜ 上声1拍め Fis音 H音 Dis音 E音	㉜ 上声1拍め G音 H音 Dis音 E音
㉝ 中声1拍め G音	㉝ 中声1拍め 四分休符
㉞ 上声3拍め D音上装飾記号なし	㉞ 上声3拍め D音上tr.
㉟	㉟ 終止線上フェルマータなし

### 楽 曲 分 析 (譜1<sup>7)</sup> 参照)

この曲は、三つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部 ①~⑬ (13)	第2部 ⑭~⑳ (11)	第3部 ㉑~㉟ (20)
主 題 ①~⑧ (8)	主 題 ⑭~⑰ (4)	主 題 ㉑~㉓ (12)
間奏1 ⑨~⑬ (5)	間奏2 ⑱~㉑ (7)	コーダ ㉔~㉟ (8)

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例：第4小節め→④, 第3小節めから第10小節め→③~⑩。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例：変ロ音→B音, 嬰へ音→Fis音。

7) この小論における「Sinfonia 7」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter - Verlag. Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

## 各部分における楽曲分析

### 第1部

#### 主題

- ①～②・①～②上声部に、三つの八分音符と一つの四分音符からなり、4度跳躍上行してから順次上行する要素（a）と、（a）とタイで結ばれた音を含む八つの八分音符が2度下行し3度跳躍上行してから順次下行する要素（b）らなる主題（T）がある。
- ・①～②中声部は、全休符である。
  - ・①～②下声部は、主音を鳴らした後、（a）とリズム的統一性を持たせた八分音符三つと長音符からなる要素（c）がある。（c）の四つの音の音程は、様々に変化して登場する。
- ③～④・③上声部の（a）は、十六分音符による要素（d）が加わる変化（a'）をして（b）につながり、主題の二重化のための主題（T'）を形作っている。③～④上声部の（T'）は、③～④中声部の（T）の3度上の音を鳴らし、主題の二重化を行っている。
- ・③～④中声部は、①～②上声部の（T）を4度下に移し、e moll<sup>8)</sup>からD durを通過してh mollに転調している。
  - ・③～④下声部は、（c）で和声的支えを行っている。
- ⑤～⑥・⑤～⑥上声部と中声部は、③～④と声部の立場を交代して主題の二重化を行っている。⑥上声部の（b）は、タイの後、2度順次下行せずに3度跳躍下行（b'）することによって、h mollからe mollへの転調を容易にしている。また、⑤～⑥上声部（T）と中声部（T'）の音程は3度の転回音程6度である。
- ・⑤～⑥下声部は、⑤に（d）の反行形（P）と（d）を置き、⑥にe mollの導音と（c）を使ってトニックを鳴らして、h mollからe mollへの転調を明確化している。⑥の（c）は、長音符がなく八分音符四つ（c'）となっている。
- ⑦～⑧・⑦～⑧上声部は、（b'）の反行形の逆行形の一部（q←）と（b）の逆行形（b←）の一部からなっている。
- ・⑦～⑧中声部は、（c）と（b←）からなり、（b←）は⑧上声部の（b←）の3度下の音を鳴らしている。
  - ・⑦～⑧下声部は、①～②上声部の（T）を1オクターブ下で忠実に再現している。

#### 間奏1

- ⑨～⑬・⑨～⑬上声部は、⑩に（b'）、⑪に（a）の断片（a/）、⑫に（b）の断片の拡大形（b/×）、⑬にカデンツと続き、第1部をh mollで終了している。
- ・⑨～⑬中声部は、⑨に（c）、⑩に（b）の断片（b/）、⑪に（a/）、⑫に（b/）、⑬にカデンツと続き第1部を終了している。
  - ・⑩と⑪中声部の（b/）と（a/）は、⑩と⑪上声部の（b'）と（a/）の3度下の音を鳴らしており、主題の二重化を反映した間奏となっている。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大文字は長調、小文字は短調を表わす。  
例、ハ長調→ C durあるいはC;、イ短調→a mollあるいはa.

- ・ ⑨～⑬下声部は、⑨に (b′), ⑩に (a /), ⑪に (d) の逆行形 (d ←) と (b /), ⑫に (b) の逆行形 (b ←), ⑬にカデンツと続き第1部を終了している。

## 第2部

### 主 題

- ⑭～⑰・第2部は、e mollで始まる。第1部がh mollで終了するやいなや、e mollに見事に転調している。
- ・ ⑭～⑰上声部は、e mollである⑭～⑮では休符で無音である。⑯～⑰に、h mollで (T) をおいている。この⑯～⑰上声部の (T) は、③～④中声部の (T) と同じ音高である。
- ・ ⑭～⑰中声部は、⑭～⑮に、e mollで (T) をおいている。⑭～⑮中声部の (T) は、⑦～⑧下声部の (T) と同じ音高である。(T) のあとは、⑯に十六分音符で凝縮された (b /), ⑰に (c′) と続いている。
- ・ ⑭～⑰下声部は、(d) を様々に変化させた (d′) をかき鳴らし、上の声部の和声的支えを行っている。

### 間奏2

- ⑱～⑳・⑱～㉔では、⑭～⑰下声部におかれていた (d′) を⑱・㉒・㉔の上声部、⑲・㉑の中声部、㉓・㉔の下声部においている。㉒上声部の (d′) と、㉑の中声部では1オクターブと3度違い、㉒の上声部では2度違い、㉓の下声部では2オクターブ違い、㉔の下声部では2オクターブと5度違いのゼクエンツとなっている。この間、h mollからD durへ転調している。
- ・ ⑱～㉔上声部は、(d′) を主とし、ほかは繋ぎとなる長音符をおき、ゼクエンツの流れを作り、D durで第2部を終了している。
- ・ ⑱～㉔中声部は、⑱で、(a) の音程変化した (a′) をおき、その後は、(d′) と繋ぎの長音符で上声部と掛け合いながら、㉔で (k) に入り、第2部を終了している。
- ・ ⑱～㉔下声部は、(a /) を⑱・⑲・㉑に、(b /) を㉒・㉔に、おいた後 (d′) に繋がり、第2部を終了している。⑱の (a /) は、⑱中声部の (a′) と3度差で沿っており、主題の二重化を意識した処理がなされている。

### 第3部

#### 主題

- 25～36
- 25～36上声部は、25～26に（T）をD durでおいた後、第2部の14～17下声部のように（d'）をかき鳴らし、中声部と下声部にめまぐるしく転調しながら現れる（T）を、和声的に支えている。上声部の（d'）は、27と28及び32と34で、2度違いのゼクエンツとなっている。
  - 25～36中声部は、25～29を（d'）と長音符で繋ぎ、30の休符の後、31～32にはh mollからa mollにぬける（T）を、33～34にはa mollからg mollにぬける（T）をおき、35～36には主題の二重化のために（a'）と（b）の組み合わせになっている（T'）をg mollからe mollにぬける形でおいている。31～34の（T）は、転調のために（a）に続く（b）が3度跳躍下行の（b'）となっている。35～36の（T）は、転調のために（a）に続く（b）が2度順次下行した後の上行が4度跳躍している（b'）。35～36の（T）は、下声部の（T）の3度上の音を鳴らしている。
  - 25～36下声部は、25～26と休符で無音の後、25～26上声部と同じD durの（T）を2オクターブ下におき、h mollの（T）を続けた後、主題の二重化のために（a'）と（b）の組み合わせになっている（T）を中声部の（T）に沿ってその6度下で鳴らし、35～36にg mollからe mollにぬける（T）をおいている。

#### コーダ

- 37～44
- 37～44上声部は、37～38でe mollの（T）を曲頭と同じ高さで再現させてコーダに入り、40・41と（a /）をa mollでおき、42で16分音符に凝縮された（b /）と（d'）を鳴らしてe mollに戻し、43で（d'）を配したカデンツ（k）に入り、44でe mollの主音を響かせて曲を終了している。
  - 37～44中声部は、38で主題の二重化のように見せかけながらも単純に順次下行し、上声部（T）の3度下と6度下の音を鳴らす見事なフェイントを行い、38～41に（b /）（a /）（a /）（c）と並べ、42に休符の後、十六分音符に凝縮された（b /）をおいてカデンツに入り、ピカルディの3度である主音の長3度上の音で曲を締めくくっている。40～41中声部の（a /）は、41上声部の（a）とストレッタとなっており、あたかも（T）のストレッタが始まるような緊張感を醸し出している。
  - 37～44下声部は、（c）と長音符の後、39～41で（d'）を3小節鳴らして、e mollの導音に至り、休符の後、（k）のバスらしい動きをして主音に落ち着き曲を閉じている。39～41の（d'）は、小節毎のゼクエンツになっている。すなわち、40は39の5度下、41は40の3度下で、それぞれゼクエンツしている。また、この音形の1～2拍めは、29中声部の（d'）ともゼクエンツの関係にある、29中声部の（d'）は、39の5度上を奏している。

## 演奏解釈 (譜2参照)

## テンポ

テンポに関して、諸校訂版<sup>9)</sup>は、表Ⅱのような指示をしている。

表Ⅱ 諸校訂版における「Sinfonia 7」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicschoff	Andante molto espressivo ♩ = 56
Ferruccio Busoni	Andante con moto
Alfredo Casella	Poco adagio e molto espressivo
S.A.Durand	Moderato
James Friskin	Andante espressivo ♩ = 60
Vilem Kurz	Allegro risoluto
Wm.Mason	Andante espressivo
G.E.Moroni	Lento moderato ♩ = 88
Bruno Mugellini	Andante molto espressivo ♩ = 58
Julius Rötgen	Lento espressivo ♩ = 56
井口基成	Andante molto espressivo
千倉八郎	Andante ♩ = 63

また、内外10人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 7」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	2'35"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	2'55"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	1'33"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	2'38"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	2'10"
高橋悠治	1977~78年	ピアノ	1'18"
田村宏	不明	ピアノ	2'28"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	2'20"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	2'26"
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	2'29"

クリストフ・エッシェンバッハと高橋悠治の演奏時間は、2倍以上の開きがある。エッシェンバッハは、十六分音符にも豊かなアーティキュレーションの変化を付けて、叙情性豊かに歌い上げている。高橋は、速いテンポに加えて、驚くことに装飾音を多用した演奏をして

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

いる。他の演奏者も装飾音を用いることはあっても、高橋ほどの多用はしていない。この両者の演奏を初め、他の演奏も、一つ一つの音を手の中で大切に転がすような、抑制の利いた演奏をしており、自由に心の内を発露するような演奏はない。その中にあって、ヘルムート・ヴァルヒャは、比較的開放的な演奏をしている。ヴァルヒャは、最後のピカルディの3度に向けて段々強くしていき、強く堂々とピカルディの3度を弾き切っている。これには、強い印象を受けた。

筆者は、「Andante espressivo ♩=60」というテンポをとり、ゆったりしたテンポで、豊かに歌う演奏をしたい。

### アーティキュレーション

十六分音符だけでなく八分音符も四分音符も、主題の切れめ以外は、レガートに演奏する。上下する音の自然な流れを楽しみたい。主題の切れめの表現をしたいところと、主題の切れめを模した表現をしたいところには、( | ) を付した。

### 装飾音

「W.F.バッハのための小曲集」の「Fnatasia 3」(BWV 793)には、1カ所、tr.が付されているが、「Sinfonia 7」(BWV 793)には、装飾音符が付されていない。写本の中には、装飾音が多く付されているものもあるが、筆者は、装飾音なしで演奏し、音の連なりをレガートで美しく表現したい。

### 各部分における演奏解釈

- ①～⑧ ・ 全曲神秘的に、流れの美しさを意識して奏でる。主題の(a)は*cresc.*を、(b)は*dim.*をつける。
- ・ ①上声部の(T)は、*p*で神秘的に弾き出す。
  - ・ ③中声部の(T)は、*mp*とする。⑤上声部の(T)は、*mf*とし、⑥下声部の(T)は、*f*として、(T)の塊で、*cresc.*していくようにする。
- ⑨～⑬ ・ 間奏は、*mp*で始める。⑩を*mf*とし、⑬は*dim.*して第1部を納める。
- ・ ⑩と⑪の上声部と中声部が3度で動くところは、上行しているところに*cresc.*を、下行しているところに*dim.*をつける。
- ⑭～⑳ ・ ⑭中声部の(T)は、これも*p*で神秘的に弾き出す。
- ・ ⑯上声部の(T)は*mp*。⑱は*mf*。⑲の3拍めは*f*とし、⑳上声部1拍めH音を、前半部のクライマックスとする。
  - ・ クライマックス後は、㉑から1小節毎に、*mf*、*mp*と音量を下げ、第2部を終わる。
  - ・ 第2部の十六分音符の(d')は、音量は控えめに、しかし、その美しさを充分意識して、下行するその動きに沿って2小節毎に、細かく*dim.*するように奏する。
- ㉒～㉖ ・ 第3部は*mp*で始め、㉓下声部の(T)は*mf*、㉔下声部の(T)は*f*と、ここも、(T)の塊で、*cresc.*をする。

- ・ ③①中声部の (T) は, *mp* と一旦音量を落とし, ③③中声部の (T) は, *mf*, ③⑤下声部の (T) は *f* にし, *cresc.* をする.
  - ・ ③⑥の中声部と下声部は (b) であるが *dim.* せず, 少しテンポをゆるめ, *allargand* 気味にして, 第3部を終わる.
  - ・ 第3部の十六分音符の (d') は, 第2部同様に音量は控えめにするが, 上行する動きのときは, その動きに沿って少々 *cresc.* する.
  - ・ ③⑥上声部の最後の (d') は, 第3部の最後の音に向かって疑問を投げかけるようにして停まる.
- ③⑦~④④
- ・ コーダは, 第3部の終わりに投げかけられた疑問に, 静かに答えるように, *p* で始める.
  - ・ ③⑨から1小節毎に, *mp*, *mf*, *f* と音量を上げていき, ④①上声部3拍めのC音に, この曲最大のクライマックスを迎える. ④②~④③の中声部と上声部の (a /) のストレッチ的緊張感を生かして, クライマックスを盛り上げる.
  - ・ クライマックス後は, 下行する (d') に沿って *dim.* し, ④④では, 少々テンポをゆるめ, 最後のピカルディの3度に一条の光と救いを感じ, 静かに曲を閉じる.

## お わ り に

「Sinfonia 7」は, 神秘的な美しい曲である. 主題の二重化も重厚さを増す効果を出している. 細かい十六分音符の流れと重厚さの対比も見事である. 曲の最後はピカルディの3度で, 悩み多き人生に一条の光をあて, 救いを与えているかのようである.



## 参考文献・参考楽譜・参考CD

## \*参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（音楽之友社）
- ・山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（ムジカノーヴァ）

## \*参考楽譜

## 原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979)
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972)
- ・J.S.BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext (C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933)
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973)
- ・バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 原典版 角倉一朗校訂（カワイ出版 1983）
- ・バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 原典版 長岡敏夫編（音楽之友社 1965）

## 校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」 Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
- ・BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni (G.Schirmer, New York 1967)
- ・J.S.BACH 「Dreistimmige Inventionen」 Ferruccio Busoni (Breitkopf&Haltel Weisbaden)
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」 Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」 Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」 James Friskin (J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」 Alfred Kreutz (B.Schott's Sohnen Mainz 1950)
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TŘÍHLASÉ SINFONIE」 Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
- ・BACH 「Three-Part Inventions」 WM.Mason (G.Schirmer Inc New York 1967)
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」 G.E.Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」 Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
- ・バッハ 「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」 バッハ集4 井口基成（春秋社 1983）
- ・バッハ 「インヴェンション」 （音楽之友社 1955）
- ・バッハ 「インヴェンション」 全音楽譜出版社出版部編（全音楽譜出版社）
- ・バッハ 「インヴェンション&シンフォニア」 ピアノ指導講座7 千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・バッハ 「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」 千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・J.S.バッハ 「インヴェンションとシンフォニア」 Hans Bischoff 角倉一朗訳（全音楽譜出版社 1972）

## \*参考CD

- ・Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S.BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
- ・Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)
- ・Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)
- ・Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079 (VICTOR)
- ・Andrés Schiff (Piano) 1985 「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)
- ・高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
- ・田村宏 (Piano) 1989 「J.S.バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
- ・Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113 (ARCHIV)
- ・Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG VICTOR)
- ・Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961 「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜1 「Sinfonia 7」 BWV 793 ①~④④ (楽曲分析)

第1部  
主題

①

T T'

a b c d a a' b b'

e: → D: → h:

⑤

a a' b b' c b c

h: → e: → h:

p d c' T

→q

間奏1

⑩

b' a/ b/× K T

h: → e: a/ b/ d' d' d'

第2部  
主題

⑮

a b b/ c

h: → e: d' d' d' d' d' d'

間奏2

⑱

a/ d' d' d' d' d' b/

h: → D: a/ a'

ゼクエンツ①

⑳

ゼクエンツ① d' d' d' d' d' d'

h: D: a' b/ d' d' d'

第3部  
主題

The score is divided into six systems, each with a measure number in a box at the beginning of the treble clef staff:

- System 1 (Measures 24-26):** Treble clef starts with measure 24. Bass clef has figured bass. Annotations include 'K' above measure 24, 'ゼクエンツ①' below measure 24, and 'a' above measure 25. A bar line is present after measure 25.
- System 2 (Measures 27-29):** Treble clef starts with measure 27. Bass clef has figured bass. Annotations include 'ゼクエンツ②' below measure 27, 'a' above measure 28, 'ゼクエンツ②' below measure 28, 'ゼクエンツ④' above measure 29, and 'a' above measure 29.
- System 3 (Measures 30-32):** Treble clef starts with measure 30. Bass clef has figured bass. Annotations include 'd'' above measure 30, 'b' below measure 30, 'ゼクエンツ③' above measure 31, 'a'' below measure 31, '3°' above measure 32, and 'b'' below measure 32.
- System 4 (Measures 33-35):** Treble clef starts with measure 33. Bass clef has figured bass. Annotations include 'ゼクエンツ③' above measure 33, 'a' below measure 33, 'a'' below measure 33, 'T' above measure 34, 'b' below measure 34, 'a'' below measure 35, and 'T' above measure 35.
- System 5 (Measures 36-38):** Treble clef starts with measure 36. Bass clef has figured bass. Annotations include 'コーダ' above measure 36, 'T' above measure 36, 'a' below measure 36, 'b' below measure 36, 'b/' below measure 37, 'ゼクエンツ④' above measure 37, 'b/' below measure 37, and 'b/' below measure 38.
- System 6 (Measures 39-40):** Treble clef starts with measure 39. Bass clef has figured bass. Annotations include 'a' above measure 39, 'a/' below measure 39, 'a'' below measure 39, 'c' above measure 40, 'b/' below measure 40, 'd'' above measure 40, 'K' above measure 40, and 'K' below measure 40.

Figured bass lines in the bass clef include notes like d', d'', b, a, a', b', c, and K. Some notes are marked with '3°' or '2°'.

## 譜2 「Sinfonia 7」 BWV 793 ①~④④ (演奏解釈)

Andante espressivo

① *P legato* *mp*

⑤ *mf* *f* *mp*

⑩ *mf*

⑮ *mp*

⑱ *f* 前半部クライマックス

㉑ *mf* *mp*

Musical score for measures 24-26. The piece is in G major and 3/4 time. Measure 24 starts with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The bass line features a steady eighth-note accompaniment. The treble line has a melodic line with slurs and accents. Dynamics include *mp* (mezzo-piano) in measure 25.

Musical score for measures 27-29. The treble line continues with a melodic line, and the bass line has a steady eighth-note accompaniment. Dynamics include *mf* (mezzo-forte) in measure 27 and *f* (forte) in measure 29.

Musical score for measures 30-32. The treble line has a melodic line with slurs and accents, and the bass line has a steady eighth-note accompaniment. Dynamics include *mp* (mezzo-piano) in measure 31.

Musical score for measures 33-35. The treble line has a melodic line with slurs and accents, and the bass line has a steady eighth-note accompaniment. Dynamics include *mf* (mezzo-forte) in measure 33 and *f* (forte) in measure 35.

Musical score for measures 36-39. The treble line has a melodic line with slurs and accents, and the bass line has a steady eighth-note accompaniment. Dynamics include *p* (piano) in measure 37 and *mp* (mezzo-piano) in measure 39. A wavy line under the bass line in measure 36 indicates a tempo change.

少しテンポをゆるめる

Musical score for measures 40-43. The treble line has a melodic line with slurs and accents, and the bass line has a steady eighth-note accompaniment. Dynamics include *mf* (mezzo-forte) in measure 40 and *mp* (mezzo-piano) in measure 42. A circled note in measure 41 is marked as the peak of the piece.

最大のクライマックス

テンポをゆるめる